

バードランド・ラッセルの教育思想(1)

高田, 熱美

<https://doi.org/10.15017/92>

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 5, pp.1-12, 1978-03-25. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン :
権利関係 :

バードランド・ラッセルの教育思想 (1)

高 田 熱 美

The Educational Thought of Bertrand Russell (1)

Atsumi Takada

序

この論文は、Bertrand Russellの教育思想の批判的研究である。すなわち、Russell教育思想の意義と問題点とを明らかにしようとするものである。周知のように、Russellは、今世紀における卓抜した思想的巨人のひとりといわれている。彼の知的活動は、広く、数理哲学、論理学、認識哲学、倫理学、政治学、教育学、宗教、心理学にまで及んでいる。しかも、Russellは、行動する人として平和運動、教育実践においてもその足跡を深くとどめている。

このような、活動の広大さもあるためであろう。Russellの思想・哲学を包括的に批判し、その全容を明らかにしたものは少ない¹⁾。Russellについて明らかにされているものは、ほとんどRussell思想の概説か皮相な解説書であり、たとえ意義あると思われるものでも、狭義の哲学、とくに分析哲学の分野における論文にとどまっている。ましてや、Russellの教育思想を批判し、その創造的意味と問題点とを明らかにした研究はない²⁾。本来、教育は全人間的活動であるので、教育の思想には論者の思想が集中されているものである。教育におけるRussell研究が乏しいのは、彼の教育論をその思想全体を基礎としてそこから導き、その中に位置づけ、それと統一させて理解することが困難なためである。Russellの知的活動の分野は広大である。しかも、Russellの思想においては、概念が統一されず、明確にされぬまま、ときには、逆説をもって用いられること

が多い。たとえば、Russellは、「Lindemann氏は、社会的な問題に関する私の見解と論理学や認識論に関する私の見解との間にはいかなる必然的な関連をも見えてはいないが、私は喜んでこれを受容れる。³⁾」と述べながら、他方では、教育の本質的テーマとしての「個人はLeibnizのmonadのように世界を映し出さねばならない⁴⁾。」という。世界を映し出すのは認識の問題であるが、Russellは、それが「ねばならぬ」という当為に結びつけられることに疑問を感じないのであろうか。

Russellが何を意味しているかは、彼の語るところをたんに解釈するだけでなく、想像力をもって見なければならぬであろう。その点でJagerが「Russellの哲学はまず想像的に把握されるならば最も概念的に把握されうる⁵⁾」というのは正しい。この論文は、このような理解に立つて、Russellの教育思想を彼の哲学思想全体から批判してその意味を明らかにするものである。

I

教育とはいうまでもなく人間の教育である。したがってRussellの教育思想を解明するためには、Russellが人間をどのように理解していたかを見なければならぬ。その場合、まず、Russellが見ている人間一般の分析ではなく、Russellが自己を含めて理解しかつ意味づけている人間、すなわちRussellをしてかくも知と実践に駆りたてている、Russell

という人間の全体が問われねばならないのである。

宇宙が神話の衣装を脱ぎすててから長い年月が去った。すでに近代のPascalは、科学的自然宇宙の、無限の空間の永遠の沈黙に出会って、おびえ、ぞっと身振いをしていた。Pascalにおいては、人間は宇宙から切り離されており、孤独そのものにほかならなかったのである。

Martin Buberは現代の人間と宇宙との関係を解して次のように述べる。「・・・Einsteinの世界概念は、魂の予感のいかなる実現をも意味せず、むしろ、魂のすべての予感と想像とに対する矛盾を意味している。この世界は思考されうるが、もはや想像されえない。それを思考する人間は、もはや実際にその中に生きていない。現代の自然科学を生来の思考の中に消化した世代は、数千年にわたって生成消滅した世界像の歴史の後で、自分の世界の像を持つことを断念せねばならぬ最初の世代となるであろう。⁶⁾」

古代ギリシア、中世、あるいは東洋の人間に見られたような世界と人間との和解・調和、世界に安住するということが、現代の人間にはない。たしかに、まだ近代の科学者たち、たとえばKeplerやNewtonは、自然を神が創りたもうたものと見なし、その神の御業について知ること即ち自然宇宙の神的調和、数学的秩序を知ることにおいて、宇宙と人間との結びつきを保持していた。Spinozaの哲学も、神についての認識を自然の認識から得ようとしたのである。しかしながら、現代では、自然宇宙としての世界が神の御業であるとする思惟は後退した。自然から神が棚上げされたあと自然の事実と人間だけが残ったのである。ここでは、世界は人間と対立し、人間は世界から孤立させられる。世界は、硬く、鋭い、乾いた、透明な論理的構成、無限の彼方まで広がって、人間がそこに生きることのできない思考的空間である。Bertrand Russellは、このように、思考することはできるがもはや生きることのできない世界に直面しているのである。Russellは、その論文「自由人の信仰」(1903)において次のように述べている。「人間は、もろもろの原因が成しと

げる目的を予見せずに産出したものであること、人間の起源、生成、希望と恐怖、愛と信仰とは原子の偶然な配列の結果にすぎないこと、いかなる情熱、英雄主義、思想や感情の激しさも墓場を超越して個人の生命を保持できないこと、幾時代のあらゆる労苦、靈感、人間の天才の真昼のような輝かしさも、すべては太陽系の宏大な死の中で消滅する運命を担わされていること、人間の業績の全殿堂は廃墟となった宇宙のちりの下に必然的に埋もれなければならないこと、すべてこれらのことは、全く論義の余地がないとはいえぬとしても、ほとんど確実であるので、いかなる哲学もこれらのことを無視しては存立することができないのである⁷⁾。」

ここには、Pascalが抱いた宇宙の無限空間の神秘性、沈黙の無気味さはない。Russellの宇宙は、はるかに不毛の、完全に意味を剥奪された冷厳な事実として存立する。「さて、このようによそよそしく非人間的な世界の中で、人間というかくも無力な生きものが、どうすればその生きがいの色あせぬように保ち続けて行くことができるであろうか⁸⁾。」とRussellは問う。「万能ではあるが、盲目な自然が、空間の深淵を通して現世を忙しげに回転しているうちに、自然の力になお従いながらも、洞察力と善悪の認識と思考力のない自分の母親の行ないすべてを批判する能力とを授けられた子どもを産み落としたことは、ひとつの不可思議な神秘である。親の支配の切札である死を免かれえないにも拘らず、人間は短い人生の間に調べ、批判し、認識し、かつ想像においては創造する自由をもっている。人間のみがその知るかぎりの世界にあってこの自由を有するのである。ここに、その外部生活を支配している抗し難い力に対する、人間の優越性がある⁹⁾。」Russellの叙述は、われわれをして直ちにPascalのパンセの有名な一節を想起させる。「人間はひとくきの輩にすぎない。自然のなかで最も弱いものである。だが、それは考える輩である。彼をおしつぶすために、宇宙全体が武装するには及ばない。蒸気や一滴の水でも彼を殺すのに十分である。だが、たとい宇宙が彼をおしつぶして

も、人間は彼を殺すものより尊いだらう。なぜなら、彼は自分が死ぬことと、宇宙の自分に対する優勢とを知っているからである。宇宙は何も知らない¹⁰⁾。」だから Pascal はいう。「われわれの尊敬のすべては、考えることのなかにある¹¹⁾。」と。

しかし、Russell の「認識」「創造」ということと Pascal の「考える」ということとの間には大きな違いがある。両者には、いずれも無限の宇宙の重圧が加わっており、その叙述には虚無の色合いが漂よう。だが、Pascal が宇宙の沈黙に戦慄し、孤独をかみしめる他ならぬ私自身を「考える」のに対し、Russell は第三人称としての人間の働き、つまり、人間が宇宙を認識し想像において創造すること一般を考えるのである。だからこそ Russell は徹底的に絶望することはなかったが、同時に、全き希望へ至る道を探しあぐねることになるのである。それゆえ、宇宙の闇の中に在るひとりの私、私である人間とはそもそも何者であるのかという問いは、Russell の思想においては問いつめられることはなかったのである。

Russell の宇宙は論理的な無限空間へと抽象されるたんなる事実である。Russell は事実のもつ非情な力をありのままに認識する。認識というひとつの見方は、近代自然科学の基本であって、それは、世界からあらゆる意味を剥奪する仕方で見ることである。古代ギリシアやストアの哲学者たちも、やはり Russell と同様世界を第三人称として見たが、彼らにとって人間は世界の一部であり、世界と和解したがって、世界は生々とした、人間が安住できるコスモスであったのである。これに対して Russell の宇宙は、もはや人間が住むことのできない不毛の世界なのである。

何のために世界を事実ありのままに見るのであろうか。それは、世界の事実構造を解明してそれを支配するためではない。これは付随的な事柄いわば事実の解明の結果として生じることにはすぎない。また、世界の支配は、その広大な無限性を考えるならば、不可能であることは明白である。Russell は、世界を冷厳な事実と

して直視し、認識するというそのものに価値をおいているのである。即ち、世界を事実として認識することに広義の倫理的意味を感じているのである。このために、Russell は、主観的情緒的に世界を見ることはいうまでもなく、哲学における神秘主義、形而上学、宗教によって世界を意味づけることを拒否する。彼は「何を信じるか」(1925)において次のように述べている。「明らかにわれわれは自然の一部であり、自然は、われわれの願望、われわれの希望と恐怖とを物理学者が発見し始めている法則に従って産出したのである¹²⁾。」「自然の哲学は不当なほど地上的であってはならない。自然哲学にとって、地球は、銀河系の中の比較的小さな恒星のさらに小さな惑星のひとつにすぎない。このとるにたらぬ惑星に寄生する微妙な生きものを喜ばせるような結果をもたらすために、自然の哲学をゆがめるなどということは滑稽であろう。哲学としての活力説や進化主義はこの点で均衡と論理的妥当のセンスを欠いている。これらは、個人的にわれわれに興味ある人生の現実を地表に限られた意味ではなく、宇宙的な意味をもつものと見なしている。楽観主義も悲観主義も、宇宙の哲学としては、同じ素朴な人間中心主義のあらわれである。遠大な世界は、自然の哲学から知るかぎり、善でも悪でもなく、われわれに禍福をもたらすことにも無関心である。すべてこのような哲学は自己を誇大視することから生れるのであって、これは天文字を学べば最上に矯正されるのである¹³⁾。」Russell は、その晩年に次のような感情を吐露している。「Kant のように道徳法を星またたける大空と同一の平面におくことは私にはできない。『観念論』と自称する哲学の根底にひそむ、宇宙を人間化しようとする試みは、それが真であるか偽であるかという問題とは全く関りなしに、私には不愉快である¹⁴⁾。」

宇宙の冷厳な事実を認識することは人間の脆弱さを認識することである。Russell はくりかえし述べる。「宇宙の見地から見れば、生命や経験は因果的にはほとんど重要ではないということを私は深く確信し続けてきた。天文学の

世界が私の想像を支配し、われわれの惑星はもろもろの銀河系と比較すればとるにたらぬものだということを、私は強く意識している¹⁵⁾。広大な事実としての宇宙は人間を圧しているが、それは愛憎の対象にさえならない。宇宙に対する叛逆や怒りもまたひとつの束縛である¹⁶⁾。それゆえ、宇宙の真実を直視して、その法則に従い、かつ人間の宇宙的微弱さを受容することを恐れぬ勇気をもつことが、人間の尊厳性であろう。「敵意ある諸力の中にある人類の孤独はすべて一個人の魂に集中される。個人の魂は、あらゆる勇気をふるい起こして、その希望や恐怖を全く顧慮しない宇宙の全重圧と孤りで闘わなければならないのである¹⁷⁾。」闘うことは宇宙とではなくて、私自身における自分との闘いである。つまり、ここでは、宇宙を認識することによって人間が自己の魂に感得する全重圧との闘い即ち人間理性の不屈さが問題なのである。この透徹した理性によってこそ、人間は世界と訣別して孤り道を歩むことができる。こうして宇宙と人間の地位が逆転する。「しかし、価値の哲学においては事情は逆になる。自然はわれわれが想像しうるもの的一部分にしかすぎない。実在するものあるいは想像されうるものであれ、すべてのものがわれわれによって評価されうる。しかもわれわれの評価が誤っているということを示す外的基準はない。われわれ自身が究極的かつ反駁されえない価値の裁決者である。……この価値を創造するものはわれわれであり、価値を与えるのはわれわれの願望である。この王国においてはわれわれが王である。¹⁸⁾」

この結論は、現代分子生物学の巨匠 Jaques Monod の哲学的結論と極めて類似していることに気づくであろう。「人間は、ついに、自分がかかってそのなかから偶然によって出現してきた〈宇宙〉という無関心な果てしない広がりの中だけでただひとりで生きているのを知っている。彼の運命も彼の義務もどこにも書かれてはいない。彼は独力で〈王国〉と暗黒の奈落とのいずれかを選ばねばならない¹⁹⁾。」この結論に関するかぎり、Monod は、Russell の思想の延

長線上にあるとってよい。人間はもはや他の何者にも頼ることなく、独力で、不屈の勇気をふるい起こして、自己の王国を築くほかはないのである。

しかしながら、人間は、宇宙の無限の拡がりの中ではほんの瞬間だけ宇宙を認識し、自らの王国を建設できる無力な存在であることには変りはない。すべての人間は宇宙の諸力に抗し切れずに亡ぶという「共通な運命の絆²⁰⁾」を負っているのである。ここから、人間のはかなさと同時に、人間に対するあわれや思いやり²¹⁾の感情が生まれ出るのである。かくして、Russell の思想には、宇宙の冷厳な事実に向かう不屈の理性と宇宙の永遠さに比してはかなむべき人間への愛が流れるのである。したがって、人間の理性は偉大とされ、あたかも理性を謳歌する楽観論が説かれているように見えながら、本質は、アトラスのように超人的で、透徹した理性によってのみ人間は支えられるほかはないのであって、その内奥には力なき人間への愛がニヒリズムを伴って奏でられるのである。

II

Russell はその「自伝」のプロローグで次のように述べている。「私の人生を支配してきたのは単純であるが圧倒的に強い三つの情熱—愛への熱望、知識の探究、そして人類の苦悩についての忍びがたい同情であった²²⁾。」知識の探究は冷厳な事実をあくまで解折して行こうという理性によって、愛への熱情は人間が本来孤独な存在であるということから、同情はさらに広い人類の宇宙的孤独と微弱さから生まれるのである。Russell においては、三つの衝動が宇宙における人間の地位と関わりながら、しかも宇宙によって偶然に与えられた人間の特殊な優越性として、人間の王国を建設することになる。

もちろん、われわれがここで追求すべきことは、Russell の思想自体である。彼はいう。「人間を哲学者にした動機はいろいろある。最も尊敬すべき動機は世界を理解しようとする願望である²³⁾。」「あらゆる伝統的動機が結び

ついて私を哲学へ導いたが、とくに影響を与えたものが二つある。最初私を動かしその後ずっと動かしつづけたものは、確実に真として受け入れられうるようなある知識を発見したいという願望であった。もうひとつの動機は、宗教的な衝動を満足させるものを発見したいという願望であった²⁴⁾。」それゆえ、Russellは「人びとが宗教的信仰を欲するような仕方で確実なものを求めた²⁵⁾。」のである。

Russellにとって世界を理解するということは、事実についての確実な知識つまり厳密かつ正確であらゆる時と場所とにおいて妥当する不変の知識、しかも、こういう知識から成る世界の全体に関する知識を発見することであった。しかしながら、Russellは、宗教にも数学にも科学にもそれを得ることはなかった。宗教はその真実性を証明できない、人間の想像によるものであった。これに対して、「数学は正しく見れば真理のみならず最高の美をもつ²⁶⁾」のであって、「数学は、われわれを人間的なものからさらに遠くひき離し、現実世界のみならずすべての可能的な世界も従わねばならないところの絶対的必然性の領域へ連れていくのである。そしてまさにここにおいて、数学はその住家を建てあるいはむしろ永遠にそびえたつ住家を見出すのであり、そこではわれわれの理想は完全にみたされ、われわれの最善の希望がさまたげられることはないのである²⁷⁾。」しかしWittgensteinは、数学的真理はトートロジーにすぎないことを明らかにして、Russellに衝撃を与えた²⁸⁾。数学は世界の実在を反映しているわけではなく、それはただ論理的に整合された人工の秩序であったのである。「私はプラトニックな永遠の世界への多少とも宗教的な信仰から出発したが、そこでは数学が天国篇の最後の歌におけるような美で輝いていた。だが永遠の世界などは取るに足らぬものであり、数学は同じことを違った言葉でいう技術にすぎない、という結論に達した²⁹⁾。」また、科学的知識の哲学的理由づけもRussellが望んでいたようには進まなかった。Russellにとって、科学の知識が成立するためには要請が必要であり、結

局、科学の知識は仮説を前提とした確率的なものに他ならないのである。従って、「あらゆる人間の知識は、不確実で不精密で部分的である³⁰⁾」

かくてRussellは結論する。「失われたものは完全性と究極性と確実性を見出そうとする希望であった。得られたものは私には嫌なある真理への新たな服従であった。しかしながら、以前の信念の放棄は決して全面的ではなかった。あるものは私のもとに残り今も残っている。私はいまでも真理は事実へのある関係であり、事実は一般に非人間的であると考えている。私はいまでも人間が宇宙的にはとるにたりないものであり、公平にここといまによって歪められずに宇宙を見ることのできる存在者であるならば—そういうものがあるとして—書物の終り近くにつける脚注以外では人間についてふれることはほとんどないであろうと考える³¹⁾。」それゆえ、「われわれは、不完全であろうとも、Leibnizのモナドのように世界を映しうると私は考える。そして、自ら、できるかぎり物を歪めぬ鏡になることが哲学者の義務であると思う。しかしまた、われわれの本性そのもののために避けることのできない歪みを認めることも哲学者の義務である。そういう歪みの中で最も根本的なものは、われわれが世界をここといまの観点から見るのであって、有神論者たちが神に帰するようひろい公平さで見るとではないということである。そういう公平さに達することはわれわれには不可能であるが、それに向ってある距離を歩むことはできる。この目標への道を明らかに示すことが哲学者の最高の義務である³²⁾」

哲学者の義務は人間の義務でもある。Russellは人間理性の限界を認めながら、理性によって世界を理解するというひとつの探求を人間の倫理にまで高めたのである。いうまでもなくこの原動力は宇宙によって偶然に与えられた力であって、それは知に対する人間の根源的な衝動ということができる。

ところで、他方ではRussellは地上における現実の人間への愛によっても突き動かされて

きた。これは宇宙における人間の孤独と深く関ってきたものであった。「・・・1901年の始めに私は宗教的な人びとが回心と呼んでいるものとたがわぬ経験をした。私は突然多くの人びとがもっている孤独をまざまざと感じ、この悲惨な孤立を軽減する方法を発見しようと必死に願うようになった³³⁾」以来、Russellは、世界を理解するという知的探究と同時に人間の政治、教育の問題に眼を注ぐことになる。彼は、第一次大戦における反戦平和運動においても、「私が宗教的であれば神の声と呼んだであろうような何かは私に反対をおしとおすことを強いた³⁴⁾」という。この傾向は年を経るにつれてさらに強まる。「あの戦争のひとつの結果は、抽象の世界に生き続けることがもはや私には不可能になったことである。將軍どもがまぬけであるためにソムの野でみな殺しにされる運命を負って、若者たちが軍用列車に乗って行くのを私はいつも見た。私はこれらの若者たちに胸痛い同情を覚えた。私は苦痛という不思議な結びつきの中で自らが現実世界に結合させられているのを発見した。観念の抽象的な世界について私が抱いていたすべての大げさな考えは、私をとりまく巨大な苦悩を見れば、影うすいむしるつまらぬものに思われた。非人間の世界は時たまの避難所としては残ったが、とこしえの住みかをきずく国としては消え去った³⁵⁾」こうして、Russellにおいては世界を理解することと同時に地上における愛の実現ということが主要な課題となったのである。Russellの宗教哲学においてキリスト教が肯定されるとすれば、それは、宇宙を神話化することではなく、人間の愛を説くことにおいてである。

世界を理解することと人間を愛することとは、いずれも対立するよう見えながら基本的には補完し合う衝動である。二つの根源的衝動は、宇宙は冷厳な事実であり、そこでは人間は孤独であるという深い認識から出発している。したがって両方とも個人的な心意を越えた働きとして現われる。即ち、世界を理解することも人間を愛することも非個人的な、個我を越えて行く働きである。それゆえ、世界の理解は人間への

愛を深めることになるのである。「非個人的な思惟の発展と密接に平行して非個人的な感情の発展がある。これは少なくとも同等に重要であり、同等に哲学的世界から結果するべきものである³⁶⁾」これは、心理学的な発達段階における認識と感情との相即関係を述べているのではなく、宇宙論的世界観の帰結なのである。「理論的な側面から見れば、哲学は可能なかぎり宇宙を全体として理解するのに役立つ。情感の面では、哲学は人生の諸目標の適切な感得に役立つ³⁷⁾」という命題も、宇宙における人間の地位から導かれたものである。

したがって、世界を理解することにおける思惟や認識は、たんなる功利的な動機からくるものではない。それは、人間の根源的知的衝動から始発したものであるので、理解することそのものが無条件に意義をもつことになる。たとえ、知識の探究に限界があろうと、知識は世界における人間の可能性の発露として意味があるのである。「あるすばらしい理論が何ら実際の役に立たないとしても、それはそれ自体の価値をもつ。というのは、世界を理解するということは究極的な善のひとつであるからである³⁸⁾」だからこそ、世界における知識の探究は純粋な人間愛の拡がりに関るのである。結論は、Russellの「西洋哲学史」の終章に明らかにされている。「さまざまに対立している狂信的態度の渦中であって、統一をもたらそうとしている数少ない勢力のひとつは、科学的誠実性である。これによって私はわれわれの信念を人間にとってできるかぎり非個人的で、また地方的気質的な偏見を可能なかぎり取りのぞいた観察や推論に基礎づけるという習慣を意味しているのである。・・・この哲学的方法の実践にあたって獲得された綿密な正直さの習慣は、人間活動の全領域に拡張しうるのであって、それが存在するところでは常に狂信的態度は軽減させられ、同情と相互理解の能力を増進することができる。その独断的な自負の一部を放棄することにおいても、哲学はある生き方を示唆した鼓舞することを止めないのである³⁹⁾」

Russellの人間は、宇宙の中で孤立しかつ

高田熱美

宇宙に相對した異邦人である。この事実の認識に立って創造される人間の世界はあまりにも厳しいものであろう。Cassirer が語ったように「人間はただ彼自身の宇宙を築きうるにすぎぬ⁴⁰⁾」のである。こうして築かれる Russell のシンボリック宇宙が統一と調和を欠くように見えるのは、それが、「人間とは何か」という問いから、つまり人間の自己自身における経験の解釈から始められなかったからであろう。したがって、宇宙的孤独に耐え抜く人間の勇気がひたすら求められるのである。世界を理解することとは、世界の事実に従服すると同時に、その従服によって事実に関する理論、知識を自発的に建設することである。また人間への愛は世界の事実に従服するという自覚に立って、その共通の苦悩をいたわり合うことである。だがいずれにしても、これらは事実の重荷に耐え抜く勇気を不可欠とするのである。

確実な知識の探究、愛への熱望、人類への同情は、Russell 自身の宇宙および社会における人間の絶対的孤独の体験と結びついていた。この体験は、他方では、宇宙において苦闘するのではなく安らぐことを、孤立ではなく宇宙との和解を志向させることにもなりうるであろう。けだし、Russell はアトラスのように不屈の勇気をもって宇宙に対峙し、人間の運命に耐え抜くというシンボリック宇宙とは違ったものを垣間見るからである。すでに Russell は「自由人の信仰」において宇宙におけるストア派の自由を是認している。これを Russell は、囚われない思索、激しい欲望の重荷におしつぶされない思惟、個人的な欲望の超克、自制、と解した⁴¹⁾。したがって、ストア派の自由は何ものをも恐れず、不安を抱くこともない不動の勇気であるということが出来る。しかし、この勇気は冷厳な宇宙に対してそれに耐え抜く勇気ではなくて、自己の欲望を克服しつつ宇宙のコスモスに和合する勇気なのである。ストアの宇宙はまだ人間がそのなかに生きることのできる世界である。

Russell は、ストアの宇宙観を無視して、たんに説明の道具としてストアの自由と勇気を

取り出したのであろうか。否、説明の道具とするにすれば、ストアの背後に在る宇宙観はあまりにも深く、それを自由と勇気から分離することはできない。Russell が「自由人の信仰」においてひそかに求めていたものは、宇宙における絶対的孤独を越えて宇宙と和合することではなかったか。であれば、「自由人の信仰」には源流が二つ存在することになる。ひとつは「自由人の信仰」の基調と思われる神秘主義的宇宙からの脱脚である。これは近代の科学的理性がたどりついた終局のものであり、この理性は、宇宙を聖から俗へ、信仰の対象から実験の対象へ押し進めたのである。もうひとつは Pythagoras および Platon 的な宇宙の保持である。Russell が「宗教的信仰を欲するような仕方で確実なものを求めた」というのも、自己の絶対的孤独を越えて宇宙のコスモスの神秘性へおもむき、そこに安らごうという衝動を表明してはいまいか。

本来、宇宙の俗化は、Russell にとっては不本意な、やむをえず認めるほかはなかったものであろう。「Thales 以来哲学者たちは世界を理解しようと努めてきた⁴²⁾」と Russell はいう。Russell 自身、その探究を人間や社会ではなく外に在る世界に向けてきた。人間とその社会は愛の実践の場であるが探究の対象ではなかったのである。真理は部分的にしか知られえないとしても、世界に厳として存在するというのが、Russell の信仰にも似た信念であった。ここには、世界の真理へ向かうことによって孤独を脱し宇宙と和合するという意向が現われている。

こうして Russell は、宇宙を人間化しようとする哲学と宇宙的視野を欠いた哲学とを同時に批判することになる。たとえば、「純粹にひとりの哲学者としてみれば、Marx は重大な欠陥を持っている。彼はあまりにも実践的でその時代の諸問題に没頭しすぎていた。彼の視野はこの惑星に限られており、この中でも人間に局限されていた。Copernicus 以来、人間は自ら僭取していた宇宙的重要性をもたないことが明白となっている。この事実と同化できなかった

者は、自己の哲学を科学的と称する権利をもたないのである⁴³⁾。」さらにRussellは同時代のDeweyを批判する。「Dewey博士の世界は人間が想像力を占有しているような世界であるように思われる。天文学の世界は、もちろん存在すると認められてはいるが、それはほとんど無視されている。彼の哲学は、Nietzscheの哲学のように個人の力の哲学ではないが、ひとつの力の哲学である。即ちそこで価値あると感じられているのは社会の力である⁴⁴⁾。」かくてRussellはいう。「すべてこのことに、私はある重大な危険即ち宇宙的非敬虔と呼ばれうるような危険を感じている。人間の支配力の外に広くある事実依存するものとしての『真理』の概念は、哲学がこれまで謙譲という必要な要素を教えてきたひとつのやり方であった⁴⁵⁾。」

探究される真理は人間の外に厳存しているのであって、Deweyのようにつくられてゆくものではないのだ。真理の厳立する世界は敬虔なものである。宇宙的敬虔、Russellがこれを語るかぎり、宇宙は不毛にしてたんなる冷厳な事実とはならない。宇宙は人間が生きることのできる世界となる。「(幸福な人間の)人格は自己自身に対して分裂することもなく、また世界に対して闘いもしない。そのような人間は自らを宇宙の市民と感じ、宇宙が提供する展望と喜びとを自由に享受し、死を考えることによっても煩わされないのである。なぜなら、そのような人間は自己の後に続いて来るであろう人びとと全く別の自己自身を感じることはないからである。最も大きな喜びが見出されるのは、このような生の流れとの深い本性的な和合においてである⁴⁶⁾。」宇宙における人間の孤独を現実化する最大のものは死であろう。Russellは、「死の恐怖を克服する最も善い方法は—私にはそう思われるのだが—関心を次第に拡大して、非個人的にし、少しずつ自我の壁が後退して自己の生命がいよいよ宇宙の生命に融合するようにすることである⁴⁷⁾。」という。Russellにおいては、個人的存在は河のごときもので、これは、流れて、大海という宇宙の普遍へ没して行くべきものである。

ここには、宇宙と人間との和解がある。この

ような孤独の克服、宇宙との和解こそがRussellの思索を突き動かしてきたパトスであった。もっとも、Russellは人間が和解できる宇宙の意味構造を明らかにしなかった。Russellの哲学的努力は、他方では宇宙の意味を消滅させる方向に向けられていたので、あとには神秘主義的な感情だけが残ることになった。この感情は古代ギリシアの哲学者たちが世界に対して抱いていた感情に近いものであろう。したがって、Russellは、情念においてはギリシア的宇宙を渴望しながら、知性においては近代自然科学の世界に到達したというべきである。その点では、碧海純一が「われわれはRussellにおいて古代ギリシアの哲学者の姿の、そして近代の『理性の時代』の哲学者の姿の、再現を見るのである⁴⁸⁾。」とするのは的を得ているといえよう。厳密に言えば、Russell自身における感情と知性との分裂というより、これは、感情および知性の内部におけるそれぞれの分裂である。

III

Russellは、MarxやDeweyのように完全に人間の社会の哲学に没頭することはできなかったし、Monodのように徹底した自然科学の哲学に立ったこともなかった。かといって、Löwithのように自然的コスモスへの復帰を哲学化することもなかった。

歴史的に見れば、Russellは、現代文明の危機いわば現代理性の行き詰りをきわめて明瞭に表現している。彼の哲学は転換期の危機の哲学である。この哲学は、宇宙の意味を剝奪する自然科学の哲学によって、Russell自らが望んだ宇宙の全体的意味把握を失敗したことを物語っている。宇宙の神秘的な意味が喪失させられると同時に、それを映す人間の神秘性も失われ、人間自身に対する問いも影をひそめる。もちろんRussellには結果は不本意なものであった。従って、実践活動、たとえば政治や教育の領域では、結果よりも動機である願望の方が主座を占めることになるかも知れない。

宇宙と人間との関係の分裂、二元論的理解は、真理と人間との関係をも分裂させる。「私は若い時哲学に宗教的な満足を見出そうと期待した。Hegel を捨てた後できえ、永遠のPlaton的世界が崇める非人間的なあるものを私に与えた。私は崇敬の念をもって数学を考えた。Wittgenstein が数学はトートロジー以外の何ものでもないと教えたとき、私は悩んだ。人間の外に立っていて、畏敬の情をもつに値すると思われるようなあるものがひきおこす感情に対して、何らかの理由づけを見出そうと私はつねに激しく望んだ。それは星空……科学の示す宇宙の広さ……、偶然存在する世界をたんに記述するにとどまらぬ、とくに数学のような、非個人的真理の体系である。人間より偉大なものを何も認めないヒューマニズムで宗教を作ろうとしている人びとは、私の感情を満足させない。しかも私は、今知られている世界において人間以外に尊重できるものがあると信じることはできないのである。……星空も人間の知覚に及ばずその影響も卓越してはいない。その大きさゆえに宇宙を崇めるのは奴隸的で馬鹿げている。非個人的非人間的真理は幻想であるように見える。かくして、私の感情ははげしく逆らうにもかかわらず、私の知性はヒューマニストとともに歩むのである。この点で『哲学の慰め』は私にはない⁴⁹⁾」

すべての哲学は問題即ちアポリアを呈示するという意味では未完であるといえる。これは哲学の本質である。しかしRussell の哲学は不統一で、それ自体の内に矛盾を秘めたままであるという意味で未完なのである⁵⁰⁾。「非人間的真理は幻想であるように見える」というのは、Russell が非人間的真理、确实なものを発見できなかったことだけでなく、そういう真理を追求することに意味を見出さなくなったことにもよる。宇宙は、もはや人間がそこに生きることも、思惟においてとどまることすらもできないものとなる。宇宙と人間との隔絶は、こうして、人間への愛の実践へ向かわしめる。知識の探究よりも愛の実践が意義をもつことになる。しかし、にも拘らず、他方では、まだ人間の外

部に厳立する非人間的な真理への崇敬と憧憬とがRussell にはあった。これが宇宙との和解を渴望するのである。

分裂は統一できないのであろうか。人間が宇宙的にはとるにたりないことを述べたあとRussell は次のように述べる。「しかし私はもはや人間的要素が存在する領域からそれを追い払おうとは思わない。私はもはや知性が感覚より優れていて、Platonのアイデアの世界のみが真実の世界への入口であるという感情はもたない。以前には、感覚および感覚の上にきずかれた思想を牢獄と考え、感覚から解放された思考によってのみ牢獄から脱出できる、とつねに考えた。いまでは私はそういう感情は全くもたない。私は感覚と感覚の上に立てられた思想を牢獄の格子としてではなく窓として考える⁵¹⁾。」

真理に関する理論の一極には、永遠に客観的な実在としての真理に、あるがまま直接に触れることができるという、いわば、真理の対応論がある。他の極には、永遠の実在の真理を発見することは断念するが、より真理に近づけるように、人間が相互に共通な基準を設定しつつ探究するという、いわば、真理の一致論がある⁵²⁾。Russell は、Platonの数学的世界における永遠の真理を論理的に把握するという対応論から、人間相互の協力のもとに部分的感覺的に真理に接近して行くという一致論へ転向したのであろうか。たしかにそうである。しかし、感覚と感覚の上に立てられた思想を窓として宇宙の真理を見るというとき、やはりそれは宇宙の真理を観照しつつ宇宙と和解する道をつくることになる。感覚とは、単なる知覚の基ではなく、人間的な要素であり、人間的感情である。人間が人間的感情を窓として宇宙を見るということは、冷厳な事実を越えて、温かい感情をもって和合できるシンボルの世界に生きうることである。こう見るかぎり、Russell の宇宙は重層的意味をもっているのであり、人間はその層の深みへ進むにつれて、生を豊かにしてゆくのである。つまり、宇宙は、事実としての層とその背後にあってしかもそれを越えて人間が和合しうる意味的層とを有していて、Russell

はその意味的層に知と情とが統一される真理を想定していたのであろう。その真理と結びつく可能性をもつかぎりにおいて、人間は尊厳なるものである。だからこそ、Russell は、真理に尽くすこと、真理を知ることそのものが善であるとしたのである。

ところで、Russell においてこの可能性が解明されえなかったのは、単なる事実に対応するサインの領域に Russell がとどまろうとして、Cassirer や Langer が提唱したような高次のシンボル⁵³⁾を Russell 自身の主観的な情緒と考へ、両者の相互的関連を明らかにしえなかったためであろう。それゆえに、感情においては統一されながら、知性においては分裂していると発言せざるをえない結果に至ったのであろう。

結局、Russell は宇宙における人間の地位を定かにできなかつた。しかし、統一を欠いたように見える Russell の宇宙論において次のことは明白である。第一に、それは、人間の知力の成果である科学は、力の哲学によって指導されてはならず、また世俗的な功用の手段とされてもならないということである。第二に、世界を理解することそのものに、Russell は価値を見出しているが、その世界とは事実と論理の世界である。第三に、世界を理解することが価値あるとすれば、それはどこから来るのか。Russell は、それが宇宙に対する人間の尊厳性といい、それが人間の精神を豊かにするという。しかし、世界を理解することの究極的意味づけは、人間以外の、人間を越えたものによってしか為されえないのである。明確な自覚にまで至ってはいなかったが、Russell は、宇宙的敬虔、宇宙に対する崇拜を語るとき、世界の内にある個々の現象を解明しながらたどりつくことのできるであろう超越者を予定していたにちがいない。

かかる宇宙における人間の地位が Russell の教育思想を解く鍵である。教育は人間の王国とりわけ価値の王国の問題である。いかなる価値が人間の世界では成立し、意味を有するのか。これは教育の哲学を論究するとき明らかにさ

れるであろう。

注

- 1) 論者が知るかぎりでは、最も優れた総合的な Russell 研究書は下記の二書である。但し、後者は複数の研究者によって書かれたものである。
Jager, R.: The Development of Bertrand Russell's Philosophy, George Allen & Unwin Ltd, London, 1972
Schilpp, P.A. (ed.): The Philosophy of Bertrand Russell, New York, Tudor Publishing Co, 1944.
- 2) Russell の教育思想研究において比較的良いといえるものは下記の書である。
Park, J.: Bertrand Russell on Education, George Allen & Unwin Ltd London, 1964
- 3) Schilpp, P.A. (ed.): The Philosophy of Bertrand Russell, p. 727, New York, Tudor Publishing Co, 1944
- 4) Russell, B.: Education and the Social Order, p. 10, Allen & Unwin London, 1932
- 5) Jager, R.: The Development of Bertrand Russell's Philosophy p. 16, Allen & Unwin, London, 1972.
- 6) Buber, M.: Das Problem des Menschen, Verlag, Lambert Schneider, Heiderberg 1948, 児島洋訳「人間とは何か」p. 39, 理想社, 昭和 36
- 7) Russell, B.: Mysticism and Logic and other Essays, p. 41, Unwin Books, London, 1963
- 8) *ibid*, p. 41
- 9) *ibid*, p. 41
- 10) Pascal, B.: Pensées, Léon Brunschvicg, No. 347, 前田陽一, 由木康訳「パスカル」p. 204, 中央公論社, 昭和 41
- 11) *ibid*, No. 347
- 12) Russell, B.: Why I am Not a Ch-

- ristian, and other Essays on Religion and related Subjects; p. 49, Unwin Books, London, 1967.
- 13) *ibid*, p. 49 - 50
- 14) Russell, B.: *My Philosophical Development*, p. 131, Allen & Unwin, London, 1959
- 15) *ibid*, p. 130
- 16) Russell, B.: *Mysticism and Logic and other Essays*, p. 43, Unwin Books, London, 1963
- 17) *ibid*, p. 45 - 46
したがって、Russell から見れば、現代の Pierre Teilhard de Chardin が説くような進化論的神的宇宙観は無意味ということになる。
- 18) Russell, B.: *Why I am Not a Christian, and other Essays on Religion and related Subjects*; p. 50 Unwin Books, London, 1967
- 19) Monod, J.: *Le Hasard et la Nécessité. Essai sur la Philosophie Naturelle de la Biologie moderne*, Éditions du Seuil, Paris, 1970, 渡辺格, 村上光彦訳「偶然と必然」 p. 214, みすず書房, 1972
- 20) Russell, B.: *Mysticism and Logic and other Essays*, p. 46, Unwin Books, London, 1963
- 21) *ibid*, p. 46
- 22) Russell, B.: *The Autobiography of Bertrand Russell, 1872 - 1914*, George Allen & Unwin, London 1967
- 23) Russell, B.: *Portraits from Memory and other Essays*, p. 18, George Allen & Unwin, London, 1956
- 24) *ibid*, p. 18 - 19
- 25) *ibid*, p. 53
- 26) Russell, B.: *Mysticism and Logic and other Essays*, p. 49, Unwin Books, London, 1963
- 27) *ibid*, p. 55
- 28) Russell, B.: *My Philosophical Development*, p. 110, George Allen & Unwin, 1957
- 29) Russell, B.: *Portraits from Memory and other Essays*, p. 56, George Allen & Unwin, London, 1956
- 30) Russell, B.: *Human Knowledge, Its Scope and Limits*, p. 527, George Allen & Unwin, London, 1948
- 31) Russell, B.: *My Philosophical Development*, p. 212 - 213, Allen & Unwin, London, 1959
- 32) *ibid*, p. 213
- 33) Russell, B.: *Portraits from Memory and other Essays*, p. 35, George Allen & Unwin, London, 1956
- 34) *ibid*, p. 11
- 35) Russell, B.: *My Philosophical Development*, p. 212, Allen & Unwin 1957
- 36) Russell, B.: *Portraits from Memory and other Essays*, p. 168, George Allen & Unwin, London, 1956
- 37) *ibid*, p. 165
- 38) Russell, B.: *On Education in Early Childhood*, p. 167, Unwin Books, London, 1973
- 39) Russell, B.: *History of Western Philosophy*, p. 789, Allen & Unwin, London, 1946
- 40) Cassirer, E.: *An Essay on Man*, 1944, 宮城音弥訳「人間」 p. 317, 岩波叢書, 1953
- 41) Russell, B.: *Mysticism and Logic and other Essays*, p. 43, Unwin Books, London, 1963
- 42) Russell, B.: *My Philosophical Development*, p. 230, Allen & Unwin London, 1959

- 43) Russell, B.: *History of Western Philosophy*, p. 753, Allen & Unwin London, 1946
- 44) *ibid*, p. 781
- 45) *ibid*, p. 782
- 46) Russell, B.: *The Conquest of Happiness*, p. 159, Unwin Books, London, 1961
- 47) Russell, B.: *New Hopes for a Changing World*, p. 210, Allen & Unwin, London, 1951
- 48) 碧海純一「ラッセル」 p. 211, 勁草書房, 1961
- 49) Schilpp, P. A., (ed) *The Philosophy of Bertrand Russell*, p. 19 - 20, Harper Torchbooks, Harper & Row, New York, 1944
- 50) Alan Wood が述べたように Russell の哲学はまさに「未完の哲学」である。cf, Wood, A.: *Bertrand Russell; The Passionate Sceptic*, Allen & Unwin, London, 1957.
- 51) Russell, B.: *My Philosophical Development*, p. 213, Allen & Unwin, London, 1959
- 52) cf, Brubacher, J.: *Modern Philosophy of Education*, p. 73 - 74 New York, McGraw-Hill, 1950
- 53) cf. Langer, S. K.: *Philosophy in a New Key, a Study in the Symbolism of Reason, Rite, and Art*, Harvard University Press, 1957. 矢野萬里, 池上保太他訳「シンボルの哲学」岩波現代叢書, 1962. Cassirer の弟子 Langer は, ここで, Russell 批判を度々行なっている。